



くすい 箱

発行

桐生厚生総合病院 薬剤部

発行責任者 阿部 正樹

編集担当者 松井 朋子

大手 直樹

第 81 回目のテーマは“お薬の投与経路”についてです。

お薬は「飲む」だけじゃない？

「薬」と聞くと、錠剤やカプセルを水で飲むイメージがあるかもしれません。

しかし、薬には口から飲むだけでなく、貼る・吸う・目や鼻から入れる・注射するなど、薬を体に届けるためのさまざまな方法（投与経路）があります。

薬は、体のどこから、どのように届けるかによって、効き始める速さや効果が変わります。

今回は、代表的な薬の使い方と、それぞれの特徴をご紹介します。



お薬を体に届ける、いろいろな方法

① 内服（飲み薬）

口から飲み、胃や腸から薬が吸収されます。最も身近な方法ですが、食事や胃腸の状態などの影響を受けることがあります。そのため、薬によっては「食前」「食後」「食間」など、服用するタイミングが決められています。



② 舌下・口腔内

舌の下や口の内に薬を置いて、口の粘膜から吸収させます。消化管を通らず、比較的速く作用するのが特徴です。この方法で使う薬は、飲み込んでしまうと十分な効果が得られない場合があります。薬ごとに使い方が異なるため、薬袋や説明書の指示を守ることが大切です。代表的なものに、狭心症の発作を抑える「ニトログリセリン」などがあります。



③ 吸入

薬を口や鼻から吸い込み、気管支や肺に届けます。喘息などの呼吸器の病気に使われます。薬をきちんと肺まで届けるため、正しい吸入方法が重要です。薬の種類によって吸入方法が異なるため、使い方をよく確認し、正しく使用することが大切です。



④ 経皮（貼り薬・塗り薬）

皮膚に貼ったり塗ったりして薬を使います。患部に直接作用させるものや、皮膚から吸収させて全身に作用させるものがあります。貼り薬には、薬をゆっくり吸収させて効果を持続させるタイプもあります。



⑤ 点眼・点耳・点鼻

目・耳・鼻など、必要な場所に直接薬を届けます。主にその場所に作用させる目的で使われます。使用方法を間違えると、十分な効果が得られないことがあるため、正しい使い方を確認することが大切です。



⑥ 坐剤

肛門や膣から薬を入れます。吐き気や嘔吐などで口から薬を飲むことが難しい場合にも利用されます。薬の成分によって、肛門から吸収されて全身に作用するものと、直腸など局所に作用するものがあります。体温で溶けるようにつくられているため、置き場所や保管方法（冷所保存が必要なものもあります）にも注意が必要です。



⑥ 注射

注射は、薬を体内に直接入れる方法です。注射にはいくつかの方法があり、どこに注射するかによって、薬の吸収される速さや作用の仕方が異なります。

・ 静脈注射

薬を血管（静脈）に直接入れます。すぐに血液中へ入るため、作用が速いのが特徴です。薬や水分を一定の速度で投与する「点滴」もこの方法の一つです。点滴の管（ルート）を通して、複数の薬を組み合わせることもあります。



・ 筋肉注射

筋肉の中に薬を注射します。筋肉には血管が多く、そこから薬が吸収されます。

静脈注射よりもゆっくり作用し、ワクチンなどにも用いられます。

上腕や殿部（お尻）など、脂肪の少ない筋肉に注射することが多いです。



・ 皮下注射

皮膚と筋肉の間にある「皮下組織」に薬を注射します。

筋肉注射よりもゆっくり吸収されるものがあり、インスリンなどの自己注射に使われる薬もあります。毎回同じ場所に注射すると皮膚が硬くなることもあるため、注射する場所を少しずつ変えることが勧められています。

投与経路と薬の正しい使い方

薬は、正しい経路・正しい方法で使うことで、期待した効果を十分に発揮します。

「なんとなく」で使い方を変えず、疑問に思ったことがあれば、遠慮なく医師や薬剤師にご相談ください。



次回は、2026 年 12 月発行予定です